

ウラナミジャノメについてはヒメウラナミジャノメの項で比較近縁種として記載したように、絶滅の危機が増大している絶滅危惧種Ⅱ類に選定されています。高砂市には生息していません、近隣では加古川のごく限られた何箇所かの狭い地域で、6月半ば頃からみられます。日本全国でもその分布はせまく、神奈川県小田原市が東限でどこの産地でも発生場所は局地的な傾向が強いといわれ、対馬、壱岐、屋久島、種子島には生息が確認されているようです。私は高知市でホシミスジが生息する地区で、同じ時期に目にしたことはありますが、2008年6月に加古川の里山・ギフチョウ・ネット会員が中心となってヒメヒカゲの生息調査を実施した際に、50数年ぶりにこのウラナミジャノメにも出会えました。近縁のヒメウラナミジャノメとは目玉模様の数が少ないのが明瞭な区別点で、通常後翅裏面には3個の眼状紋がみられ（ヒメウラナミジャノメは5-6個）、4個という個体もみられます。片方の羽の目玉模様が異常に流れた珍しい変異個体もありました。一つひとつのチョウに著者による



June 14, 2008 志方町



June 14, 2008 志方町

思い入れのタイトルが付されたユニークなエッセイ集である師尾信著「蝶ウォッチング百選」という本の続編（晩聲社、2003、p.044）に”疎林に遊ぶ”ウラナミジャノメという項があって、静岡県浜北市には後翅裏面の蛇の目紋が一つオマケについた4個のものが多いという記述がありますが、地域によって特定の遺伝子をもった群が密度濃く生息している例です。こういう事実があるため、全く異なる地域で発生しているチョウをもってきて身近な野外に放つ「放チョウ」という行為は遺伝子レベルでの攪乱がおきるのでやめよう、という意見につながるわけです。

ウラナミジャノメはススキ、イヌビエなどのイネ科、カヤツリグサ科のショウジョウスゲなどが食草として確認されていますが、自然状態での正確な食草についてはほとんど未知であるといわれています。2008年からこの課題に関心をもって野外観察を続けてきましたが、



80615 志方町 ウラナミジャノメ



June 15, 2008 斑紋異常

2010年4月3日、ついに加古川の発生地でスゲ科：ショウジョウスゲの葉を食べている幼虫を確認できました。兵庫県では



1987年に明石市においてイネ科のメリケンカルカヤで中令幼虫が発見されて以来の野外発見例です。幼虫は食事タイム以外には草の根元深く身を潜める習性があるため常時葉っぱ上にはいることはなく、野外で幼虫の生態を継続観察することが容易ではないことを思い知らされていますが、何とか前蛹、蛹化、羽化などの自然観察記録をとりたいたいものです。幼虫食草の発見確認と加古川市における第二化発生に関する論文をまとめ、2011年6月に日本鱗翅学会誌「やどりが」No. 229(2011), p. 32-39に掲載されました。



Apr. 25, 2010